

今回は、宿題として提供されるドリルの活用方法を紹介します。宿題（特にドリル）を単なる復習の材料と思っている人がいます。しかし宿題は、家庭学習の核となるべきものです。全ての宿題は、一人一人に最適な「世界で唯一自分の弱点ばかりが詰まっている個別問題集＋参考書」＝「分からん帳」を作るための材料となるべきだからです。

1 良い宿題・悪い宿題

(1) 「お粗末3点セット」

「お粗末3点セット」と呼ばれている悪い宿題をご存知ですか？ 質の悪い、形だけの「読み・書き・計算（＝教科書の音読・多量の書き中心の漢字ドリル・暗算練習中心の計算ドリル）」のことです。これらに共通することは、量とスピードです。量とスピードという外見だけはもっともらしい（が、実は意味のない）力を付けるために出される宿題です。表向きは習熟という名の下に「スラスラと読めるように...」「パツと思いついて書けるように...」「サツと計算できるように...」と言って出されますが、これらは全て非常に効率の悪い学習です。これらの中でも最悪の宿題例は、算数ドリルの文章問題全文をノートに書き写して解いてくる宿題です。（文字を書くことさえ満足に出来ない年齢の子供にこれをさせると、書き写すことに力を要し、考えることは全く関係なくなってしまう。）

小学校は量やスピードではなく質が全てです。無意味なスピードを付けるために使っている学習時間を学力養成に使える（例えば10月号に紹介した算数文章問題ドリル）、子供達の学力は一気に跳ね上がります。もちろん学力とは「考える力」のことです。そしてその判定は、文章問題で可能です。学力を判定できないテストで高得点をとれるように育てているから、「テストの点数はいいのに学力（考える力）が育っていない」子供達が大勢いるのです。

(2) 宿題は「みんな違う」が基本

また、宿題は「みんな同じ」ではなく「みんな違う」が基本です。「そんなの無理だよ」という声が聞こえてきそうですね。でも子どもの選択制にすればいいのです。算数や漢字なら、例えば100問の中から子どもは5問を選択して解いてくるのです。こうするだけで一人一人の個別宿題ができます。

子どもは苦手な計算や漢字を後回しにするでしょうが、その「苦手な」計算や漢字を意識することが大切です。先生側は、その選び方から個別に苦手な計算や漢字も把握できます。そうすれば、夏（冬）休みの宿題は残り最後の10個だけにすることもできますし、効果的です。指導において最も難しいのは、個別に弱点を把握することです。これが何の手間もなくできるのですから、選択制は行う価値があると思います。音読なら何を読んでもいいことにします。あるいは、教科書の音読だけを（新出漢字も）授業の進度とは別に考え、どんどん先取りして音読指導し、それまでに音読指導が終わった全範囲を宿題の範囲とします。できない漢字や計算をくり返し行うのが、基礎基本の徹底として当然という風潮があります。それは、その単元の学習内容はその単元で、その学年の学習内容はその学年で習得しないとイケない、という考えにとらわれているからです。しかし子どもにとって最も大切な「考える力」を育てるのに、そうしたとらわれはときに障害になります。小学校六年間でゆっくり育てるという視点も必要です。

(3) 良い宿題の条件「無理なく・むだなく・効果的」

小学校の宿題は覚えるための作業ではありません。宿題の主な目的は、次の二つです。

1. お手本を数多く目にする（体験する）こと。
2. 自分だけの弱点補強テキストの材料を集めること。具体的には、「わからん帳」（後述）を作る（弱点の拾い上げる）こと。

義務教育の9年間を有効利用するためのシステムの一環として宿題をとらえると、「無理なく無駄なく効果的な」宿題が見えてきます。「わからん帳」を作らせることは、勉強の仕方を身に付けるという大事な教育目標を目指した指導です。その場だけの宿題は、子供の負担を考えると無駄が多すぎます。学力は9年間で育てるものなのです。

以下のことが宿題の条件です。ただし、小6後半からは後述するように異なります。6年生の夏から卒業までに総復習「分からん帳」作成と、中学校の準備があるからです。

1. 数が少ないこと。
2. ゆっくりできるように工夫してあること。
3. 間違ったら正解とともに切り貼りができること。「分からん帳」に入れられるように切り貼り可能なプリント形式がよい。
4. 夏休み（冬休み）の宿題の材料になるように工夫してあること。

良い宿題の例は、計算ドリルなら、筆算を書き起こすところからできるように枠だけを書いておきます（9月号参照）。「わかる（理解）」を重視した宿題では、確認したい部分（文字や数字）を記入できるように空欄にして宿題に出します。宿題はお手本を読みながら書きます。考え方を練習する算数文章ドリルは10月号で紹介しました。

また、効果的な学習の原則を教えます。「音で覚えて、絵で理解する」これがベストです。音は最も記憶しやすく、絵は考えることに使うからです。思い出すためには音がイメージを導くことを考えると「語呂合わせ」から思い出すべきキーワードを導くことは最良の記憶再現方法です。

(4)ポイントは「分からん帳」の材料にすること

今述べた条件のうち、の工夫については前号まで詳述しました。に関する宿題のドリルの量・時間は3の(3)で詳述します。大事なことは、宿題ができなくても（解けなくても）、後で役に立てられるように、「分からん帳」の材料にすることです。テストでも同様です。一度目にした問題は全て「分からん帳」の材料とします。冊子形式なら2冊用意します。

2 宿題でドリルをやる目的

(1) 低学年 自然にお手本を目にする機会を作る。

「自然にお手本を目にする」とは、次のようなことです。実例は8・9月号で紹介しました。

1 漢字練習は、真横のお手本を見ながら書けるドリルにする。

2 計算の答え合わせも、筆算のお手本（答え）を見ながら直しができるドリルを使う。

この方法は、無理なく基本を吸収するためです。もちろん間違った問題は「分からん帳」行きです。計算方法が修得できたかどうかは、次回の問題で確認します。

低学年では覚えなくてよい

低学年ではとりわけ自然に手本を目にし（体験し）、正しいもの、優れたものを五感で感じる事が大切です。これからの学習のベースになるからです。ですから宿題も、正解を覚えなくてもいいのです。

答え合わせは子どもがする。

「お手本」を目にする機会を作るために答え合わせは生徒にさせます。できれば、クラスの中で本人以外にしてもらおうと、さらに効果的です。

低学年では、「お手本」を目にする（体験する）ことです。この時期は、正しい漢字や、三角計算で10の補数や九九を何度も見ることがなにより大事です。学年が上がっても、子ども自身が答え合わせをします。そうすると、まず自然に「お手本」を目にするようになります。自分の間違いを確認できます。「分からん帳」の材料も作れます。個別の弱点を先生も生徒も保護者も知ることができるのです。たとえ、インチキをして答えを写すことがあっても、写すときにお手本を見ているので、先生が答え合わせをするよりも格段に優れた指導方法です。答え合わせも「学習」となるのです。先生が答え合わせをしたのでは、これらはどれもできません。ただし子どもの宿題の結果は、先生は知っておいて下さい。もちろん次の授業に生かすためです。

(2) 高学年 確実に基本を自分で使えるようにする。

(速くなくていい)

小学校時代に不要なスピード・不要な知識量に振り回される必然的理由は全くありません。たしかに、入試では時間との駆け引きが必要となります。でも、この制限時間内に解く練習は入試の数か月前から始めるのが効果的なのです。入試では作戦が必要となります。受験する学校のテスト構成に対応した時間配分や攻略法を考える必要があるのです。「計算が速ければ考える時間がとれる」というのは一見それらしいのですが、実は誤った（力任せの無駄の多い）作戦です。低学年からのスピードアップ練習は、入試を考えた場合ですら、非常に非効率な学習と言わざるを得ません。

3 適切な宿題の量・内容・時間

8・9月号で工夫した漢字ドリル・計算ドリルを紹介しました。宿題では、こうしたドリルをどの程度やるのがよいでしょうか。

(1) 適当な家庭での勉強時間

学年毎に覚えやすいので一年生10分～六年生60分でもよいのですが、低学年は約20分、3年は約30分、4年は約40分、5年は約50分、6年の夏休みまでは約70分、それ以降は100分位が適当だと思います。これは次に述べる宿題の中でドリルが占める比率と同じです。なお「ドリル」は、計算・漢字・音読などで、前号で紹介した算数文章ドリルは含みません。

(2) 宿題全体の中でのドリルの割合

どんなに多くても、低学年は約20%、3年で約30%、4年で約40%、5年で約50%、6年は夏休みまでは約70%までと考えます。ただし6年の2学期からは、小学校の総復習と中学の準備になるので90～100%と考えます。宿題でドリルを行う時間は、低学年で5分、3年で10分、4年

で15分、5年でも25分が上限ということです。残りの時間は、三角計算や良質の文章問題や絵コンテ宿題（国語の教科書の文を映画の絵コンテにする）など自然に言葉とイメージを連動させることができるような、「視考力」を育てる宿題にします。

一般的には、低学年ほど基礎基本を反復練習して徹底する、つまりドリルが多くて当然だと思われるのではないのでしょうか。私が必要と考えるドリルの量と割合は、それとはずいぶん違います。理由は、基礎基本とは「考える力」のことだととらえるからです。多くの方は、「基礎基本」をとり違えています。「読み・書き・計算」の徹底が考える力を自然に生み出すのであれば、学力問題はすでに解消しています。「読み・書き・計算」では考える力がつかなかったから、今の学力問題があるのです。考える力は、考える練習で育てるのです。10月号で紹介した「算数文章ドリル（思考ドリル）」はそのためのものです。ですから小学校入学前の年長さんから利用できるように作成してあります。知識や計算は、考える力を育てながら無理なく6年間かけて仕上げるものです。各学年で仕上げようとすると無駄が多すぎるのです。

（3）理想的なドリルの量と内容

先に、理想的な宿題として、「数が少ないこと」をあげました。筆者の考える理想的なドリルの量と内容をあげてみましょう。

1.計算（筆算）

「暗算はしない・させない・急がせない」。1日に2～10問限定で筆算の書き起こし（自分のノートを使う：筆算のチェック用）。

2.漢字（物語・イメージ）

覚えようとしなさい。お手本を目にする。読めるようには必ずなるのだから、書きを重視してはいけません。書きは1日5文字程度。読み仮名をふる読みドリルは10字程度。

3.音読

教科書に限定しないで絵本・新聞・辞典・辞書・参考書・小説（マンガは台詞だけなので×）も可とする。

スラスラ読めることを目標にさせてはいけません。楽しく読むこと。自分のリズムで読むことを大事にします。

（4）今あるドリルを上手に使う

オリジナルドリルでなくとも、ほんの少しの工夫で宿題を有効に利用できます。「頑張っただけでドリルを回しよう！」とドリルの反復回数が学習量だと勘違いさせるような宿題を出す先生を見かけるたびに、私はガッカリします。これは最も効率の悪い学習です。貴重な子供の学習時間を浪費させる最低の宿題の出し方です。工夫したドリルを見つける（作る）まで、同じドリルを使っていても使い方を工夫するのは、やはり「分かん帳」を使います。

工夫例：ドリルを使って「分かん帳」を作る

1.する部分を個別に選択する。

2.答え合わせの仕方（ア）合っているかいないかではなく、お手本の確認が大事であることを教える。

（イ）消しゴム厳禁を徹底する。

3.「分かん帳」の材料を決める。間違った問題・自分の解答・正解をセットにしておく（書き写さないで切って貼る準備）

4.夏用「分かん帳」の作成指導。

5.夏休み用の宿題「分かん帳・夏休み編」を作りながら学習方法（弱点克服方法の具体例）を教える。

6.夏休みの宿題は「分かん帳」の消化だけにする。

7.「分かん帳」の消化具合を授業の組み立てに使う。

8.未消化部分は次の「分かん帳」の材料として準備させる。

9.小6では宿題自体を6年間の「分かん帳」の消化にする。

このように宿題を活用すると、これだけで完全に個別対応した弱点補強ができますし、効果的な学習方法も確実に身に付けることができます。

（5）補習はしない

宿題で×だった子どもの補習をする先生がいますが感心しません。

1.計算ドリルや算数文章ドリルの宿題をチェックして、理解できていない子がいるようだったら、

その内容を次回の授業の中で上手に織り込んで、自然にみんなで理解すべきです。また、宿題を活用できれば、理解できている子に先生役を言い渡し、理解できていない子に質問させるという全員参加の個人指導という授業形態も可能です。理解していても教えることは難しいですし、子供は子供の言葉で説明してくれますので、子供には理解しやすいことも多々あります。

2.漢字の場合は、夏休みの宿題に回します。

読みは後述するようにていねいに指導しますので、問題ありません。書き」は6年間で仕上げます。また、中学へのお土産でもOKです。自分が書けない漢字を知っているだけでも勉強する気になったときに効果的な勉強ができるからです。

音読指導の例

ねらいは、

- 1.イメージ力を育てる。
- 2.物語を楽しむ。
- 3.漢字を読めるようにする。

教科書を教材に、教科書全部を1学期中に終える。教科書の進度とは別に考え、朝の時間や国語の時間で行う。

<方法>

1.先生の全文音読（お手本の提示）

生徒は教科書を見ながら、どんな話なのかを頭の中でイメージしながら聞く。メモ（漢字の読みなど）はとらない。最初からメモをとってはいけないこと、次は2の1行音読をすることを教えておくと、その場で漢字の読みなどを意識しながら聞くようになる。これを1～5回繰り返す。

2.1行ずつランダムに生徒に音読をさせる（意識付け）

先生は、生徒の名前を呼んで指名するのではなく、机間巡視しながら動作で次々に指名する。目の前に指を出したり、肩を叩いたり、机をノックしたりして、生徒が教科書から目を離さないでも指名されたことが分かるようにして集中を切らさないようにする。

3.ペアを指名して1行ずつ音読練習をさせる

漢字が得意な子と苦手な子を組ませて、練習の中で共同作業をさせる。

4.ペアを数組指定して、6～10行を振り分けて音読させる。

5.宿題としての活用方法

ページ数を指定して1行音読練習を宿題とする。ペアは当日指定します。誰が当たるか分からないのでみんなが準備します。一人で読むので適度の緊張感があります。漢字が苦手な人は自然に音読を聞きながら自分で注意して漢字を覚えようとします。

<注意>常に読んでいるのは1人であること。なぜなら、言葉は聞いてイメージを再現することが重要だからです。大勢で同時に読むと、聞くこともできないばかりかイメージすることさえなく、ただ文字を音声化するだけの無駄な時間の共有になってしまいます。要注意です。合唱のような音読は効果的ではありません。

6.また、仕上げの確認のような内容でしたら全く補習はしません。つまり、次の項目理解に必要最低限のこと以外は夏（冬）休みの宿題用にとっておきます。その場その場で全てを仕上げるという発想は大変危険であり、無駄な労力を要します。6年間で仕上げる（中学の準備をする）のが小学校の勉強方法なのです。たとえ積み重ねの必要な「計算」であっても、できていない部分が確認できれば、次の授業の中で復習を兼ねて新しい項目につながられます。積み重ねが必要な項目は、こうして宿題を利用して、生徒の弱い部分を自然に授業の中で復習しながら自然にお手本を吸収させるのです。ここを宿題の反復で切り抜けたり補習で補おうとすると、授業がマンネリ化します。授業の起爆剤は子供が見える宿題の活用なのです。宿題を見て授業の構成を的確に変更することができるのです。

夏の宿題にできる部分は全て「分かん帳」に切り貼りをさせる。やり方を指導した後は、この作業自体を宿題とする。毎月チェックしながら「分かん帳」の作り方と使い方を修得させる。こうすると無理なく無駄なく効果的な学習が楽に可能になります。

4 宿題の仕方 - 家庭での注意事項

1.「丁寧に丁寧に丁寧に」

「丁寧に丁寧に丁寧に」が原則です。速くすることはいつでも練習できますが、丁寧にする練習は小学校の時でないとなかなか身に付かないからです。

2.低学年は「コレだけでいいの？」程度が適量です。

3.みんながするけど、内容は選択（先生・生徒・保護者が選ぶ場合）

生徒や保護者の選び方を見れば家庭での学習の捉え方が見えてきます。そこで、修正が必要だと判断した場合に先生がアドバイスの的に選択します。最初から「こうして下さい」では家庭での姿勢が見えてきません。必要なのは個人情報なのです。個人情報がなければ個人指導はできないからです。ドリルは単なる復習の材料ではないというのがドリルを活かす大前提です。

4 宿題の軌跡が学力の軌跡となるように

まず、消しゴムは使わないことです。生の記録に勝るものはありません。また、生徒自身にとっても自分の書いたものが一番の参考になることも教える必要があります。宿題の軌跡が学力の軌跡となる（評価の基準にもなる）と、余計な労力は使わないですみます。時間を費やして不要な記録をとらないことも、効果的な教育だと言えます。

その上で、宿題を使って「分からん帳」を作ることで、ノートの取り方や活用方法を6年間で体得させます。この時に、消しゴムを使ってはいけないことや調べすぎもいけないことなども指導します。

5 答え合わせは子どもが自分です。直したら正答数に入れて100点で返却する。

直しが大事であることを体験的に身に付けさせるためにも、直したら正答数に入れて100点で返却すると気持ちよく宿題を使えます。ただし、直した記録はキチンとっておき「分からん帳」に利用します。当然、消しゴムは厳禁です。

5 小6は特別に考える

小6は思い出作り学年ではありません。小6は中学準備学年としての総復習と、学習形態を変化させる大事な学年です。中学校の学習方法は、小学校の学習方法とは全く違います。そのことを体験させなければ手遅れになります。最低でも

1.「分からないところが分からない」と2.「どうやって勉強したらいいのか分からない」の具体的な対策だけは確実に身に付けさせて卒業させなければいけません。この二点さえ分かっていたら、いつでも本格的な学習（弱点克服）が可能になるからです。具体的には、全ての宿題を「分からん帳」に集約するところまで指導します。こうして世界で唯一自分だけの「問題集+参考書」=「分からん帳」を作ります。これは最高の卒業プレゼントです。その子の分からない部分を全て具体例付きで示してくれるのですから、これ以上に効果的な学習材料は無いといってもいいでしょう。「分からん帳」なら、一人一人個別の最も信頼できる正確な学習の記録が自動的に出来上がります。このノートに先生のコメントが一行でもあれば、それだけで誰もが納得する「あゆみ」以上の通知表にもなります。

「消さないこと」がノート作成の大原則です。もし、この「分からん帳」が全国の小学校で実施されれば、中学校の先生は誰でも「分からん帳を見せてごらん」と言うだけで、その子がすべきことを即座に指導できるようになります。家庭との間に、これ以上の信頼感を保証するものはありません。

学校は見せかけの学力ではなく、本当の学力を保証すべき所なのです。その第一歩は生徒一人一人の本当の力を、本人も含めて誰もが分かるようにしてあげることです。それが間違った問題を「切って貼る」- これだけの作業で完璧にできるのです。

教育アドバイザー・糸山泰造

donguriclub@mac.com

FAX: 020-4623-6654

<http://homepage.mac.com/donguriclub/frontpage.html>